センター試験英語リスニング導入に伴う
長野県内高校の英語科目内容、授業実施形態の変化に関する研究

平成 17 年度 長野県看護大学特別研究補助金
研究成果報告書

研究代表者 西垣内磨留美
（長野県看護大学教授）

目　次

はじめに …… 1
研究経費 …… 2
研究の概要 …… 2
研究の目的 …… 3
調査の方法 …… 3
1. 調査期間
2. 調査対象
3. 調査方法
4. 調査内容
調査結果および考察 …… 6
1. 基礎データ
2. 選択による回答の結果と考察
1) 英語リスニング教育の方法
2) センター試験リスニングテスト得点の各大学入試算入の是非
3) リスニングテスト受験準備
4) 大学進学後の英語リスニングの教育内容
5) リスニング教育改正とその成果
3. 自由記述による回答の結果と考察
1) センター試験英語リスニング導入の問題点
2) 既出質問項目以外の高校としての取り組み、対策
結語 …… 26
資料 …… 28
1. 調査協力の依頼文
2. 質問票
3. 平成 17 年度長野県看護大学研究集会抄録
4. 平成 17 年度長野県看護大学研究集会発表資料
5. 協力高等学校リスト

はじめに

平成18年1月に実施された平成18年度大学入試センター試験より英語リスニングテストが導入された。これは従来求められている英会話能力育成のための英語教育改革に連なるものであるが、受験生を抱える各高等学校においては対策に努め、英語教育の改革を進めていることが推測される。次段階の教育を施す大学においても、高等学校の教育の変化に伴い英語教育の改革の必要性がある。また、センター試験英語リスニングテストの得点をどのように処理するかは各大学で決定することになっているため、その得点を大学毎の入学試験に算入するか否か、あるいはその比率についても、大学として検討しなければならない課題である。そこで、長野県看護大学特別研究費の助成を得て、長野県内高等学校の英語リスニング教育の実態を調査し、高等学校における英語教育の動向を探り、今後の大学英語教育、及び、英語に関する大学入試のあり方の指針とするためにこの研究を行うこととした。

研究経費

平成 17 年度　　127 千円

研究の概要

本研究は以下のような経緯で検討された。

平成 17 年度

1. 計画の立案と実態調査
    1)　予備研究、および質問紙作成
    2)　質問紙調査の実施
    3)　質問紙の回収、およびデータの集計
2. 調査結果の分析検討の実施
3. 最終研究報告書の作成

研究の目的

本研究の目的は以下のようであった。

1. 大学入試センター試験英語リスニングテスト導入に伴う長野県内高校の英語科目内容、授業実施形態の変化の実態調査
2. 長野県看護大学入学者選抜試験へのセンター試験英語リスニングテスト得点算入に関する提言
3. 長野県看護大学カリキュラム改革における英語科目内容、及び授業実施形態の改革に関する指針の探査
4. 研究成果報告書送付による調査対象校における他校とのリスニング教育内容に関する比較検討への活用

実態調査の方法

1. 調査期間

平成 17 年 9 月に実施した。

2. 調査対象

調査対象は、長野県内全日制高等学校 106 校とした。大学入試センター試験英語リスニングテスト導入に関わる調査であるため、複数科ある高校の場合は、全日制で最も大学進学率の高い科を対象とした。

3. 調査方法

調査はアンケート調査によって行った。調査結果は匿名性を守ってデータ処理し、本調査以外の目的には使用しない旨、アンケート調査のお願いに記述した。平成 17 年 9 月に各

高等学校の英語科主任宛、調査票を郵送し、回答者の郵送にて回収した。各高校英語科によって様々な勤務内容や状況があることを考慮し、回答者は英語科教員であれば必ずしも英語科主任である必要はないこととした。調査票発送数106件に対して、各高校から40件の回答を得、回収率は37.7%であった。

質問の回答については、2〜6の選択肢の中から該当するものを選ぶことを主な方法とした。加えて、センター試験英語リスニングテスト導入の問題点、および既出質問項目以外の高校としての取り組み、対策に関して自由記述形式による回答を依頼した。

4. 調査内容

質問紙は以下の項目で構成された。

1. 基礎データ
    1) 大学進学率
    2) 大学入試センター試験受験率
    3) 英語科目全体の年間総授業時間数
2. 英語リスニング教育の方法
    1) 英語科目時間中のリスニング占有率
    2) リスニング教育実施の方法
    3) リスニング教材の種類
3. センター試験リスニングテスト得点の各大学入試算入の是非
    1) 教員の意見
    2) 生徒の意見
    3) 算入の割合についての意見
4. リスニングテスト受験準備
    1) 教育体制
    2) 生徒の実力
5. 大学進学後の英語リスニングの教育内容
6. リスニング教育改正
    1) リスニング教育改正の有無
    2) カリキュラム上の変更点

3) 科目内容上の変更点

4) 改正後の比較検討の有無

5) 改正後の生徒のリスニング能力

7. センター試験英語リスニング導入の問題点に関する自由記述

8. 既出質問項目以外の高校としての取り組み、対策に関する自由記述

調査結果および考察

1.基礎データ

1）大学進学率について

平成16年度（調査実施年度の前年度）の卒業生の進路を国公立大学進学、私立大学進学、短期大学進学、浪人のそれぞれの割合を調査した。国公立大学進学率については、最高が37%、最低が0%であった。30%以上の高校は40校中4校であった。私立大学進学率については、最高が80%、最低が4.5%であった。50%以上が3校、40%台が7校、30%台が9校、20%台が7校あった。短期大学進学率は、最高が28%、最低が0%であった。浪人については、最高が33%、最低が0%であった。やはり4年制大学指向であり、国公立大学進学者の少ない高校においても、ほとんどの高校がある程度まとまった人数の私立大学進学者を抱えている状況であり、大学受験に備えた教育が施されていることが推測された。

2）大学入試センター試験受験率

平成16年度（調査実施年度の前年度）の卒業生の大学入試センター試験受験率を調査した。全体の状況を把握することが目的なので、科目数を問わないこととした。最高は100%であり、最低は0%であった。90%から100%が5校、80%台が3校あり、全調査件数の27.5%にあたる11校が対象科生徒数の50%以上のセンター試験受験者を指導していた。受験率の低い高校にあっても、本調査に熱心な回答が寄せられ、各校ともセンター試験への関心が高く、対策を講じる姿勢があると考えられた。

3）英語科目全体の年間総授業時間数

質問内容を「生徒1人あたりの全英語科目受講の年間実質時間数の平均」として回答を依頼すべきであったが、年間総授業時間数としたために、基準が定まらず、様々な方法の回答があり、結果を有効なデータとして処理することができなかった。この質問内容につい

て検討が不十分であった。ご回答頂いた先生方にこの場を借りてお詫びしたい。

2. 選択による回答の結果と考察

全体の動向、および、センター試験受験者の多い高校の動向を把握するため、選択による回答の結果は、全体の統計の他に、センター試験受験率によって2グループを抽出して処理された。グループ構成としては、受験率は100%から76%までが接近した数値で並び、次の受験率が61%であり数値として15%の開きがあったため、受験率70%以上の高校9校を第1群とし、30〜70%の高校5校を第2群とした。

1. 英語リスニング教育の方法

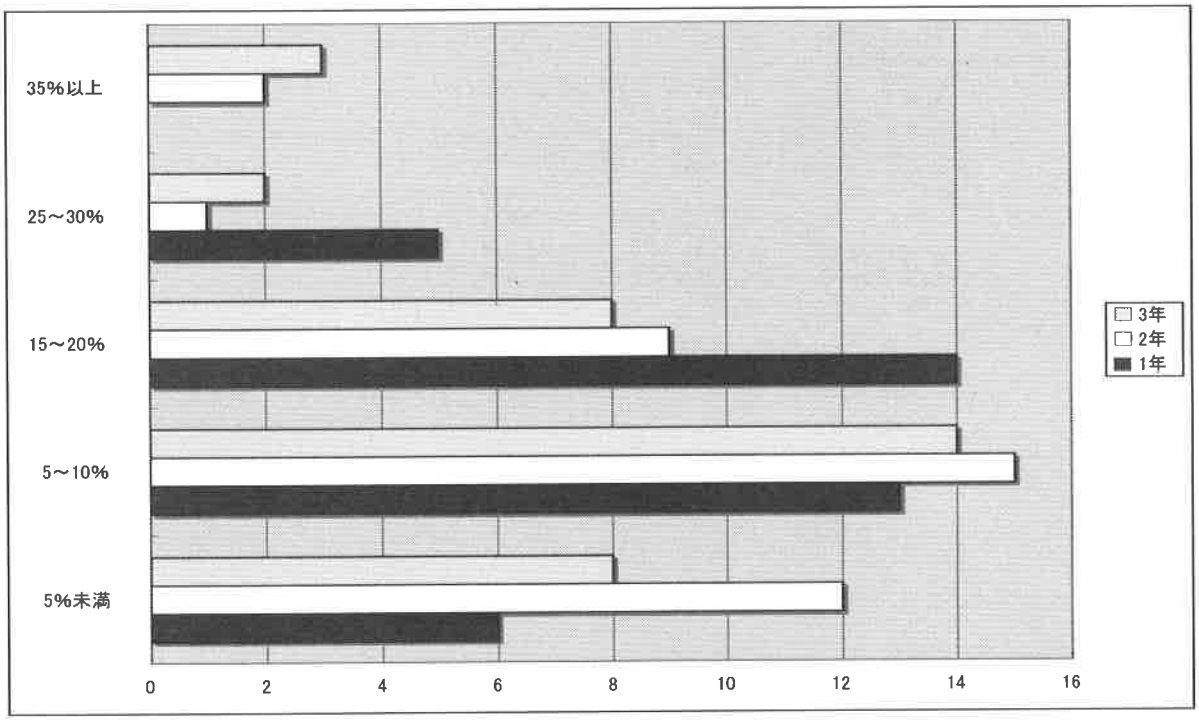
1) 英語科目時間中のリスニング占有率

英語科目時間中のリスニング占有率を各学年について回答を依頼した。前述のように、全英語科目受講の年間実質時間数の正確な数値の把握が困難であったため、各高校の英語科目時間中のリスニング占有率の概要の提示にとどまるが、結果は以下の通りである。

1年生では5%未満が6校、5〜10%が13校、15〜20%が14校、25〜30%が5校であり、35%以上はなかった。2年では5%未満が12校、5〜10%が15校、15〜20%が9校、25〜30%が1校、35%以上は2校であった。3年では5%未満が8校、5〜10%が14校、15〜20%が8校、25〜30%が2校、35%以上は3校であった。1年生では15〜20%、2年生では5〜10%、3年生で5〜10%が最も多いという結果であったが、35%以上が1年生では0であったのに対し、2年生では2校、3年生では3校に増え、高学年になるに連れリスニング教育を強化する高校も見られ、一概に学年進行に従って割合が減少するとは言えない。英語教育の時間の中で3分の1強の時間をリスニングに割いている高校もあり、リスニングの重要性を意識して重点をおいている教育体制もあることがわかる。結果を次ページの[図1]に示す。

グループ別の結果は、第1群が1、2、3年ともに15〜20%が最多であり、リスニング教育にかなりの時間を割いていることがわかった。第2群についてはリスニングの占有率は概して少なく、英語重点教育のコースがある高校のみ高いという結果であった。

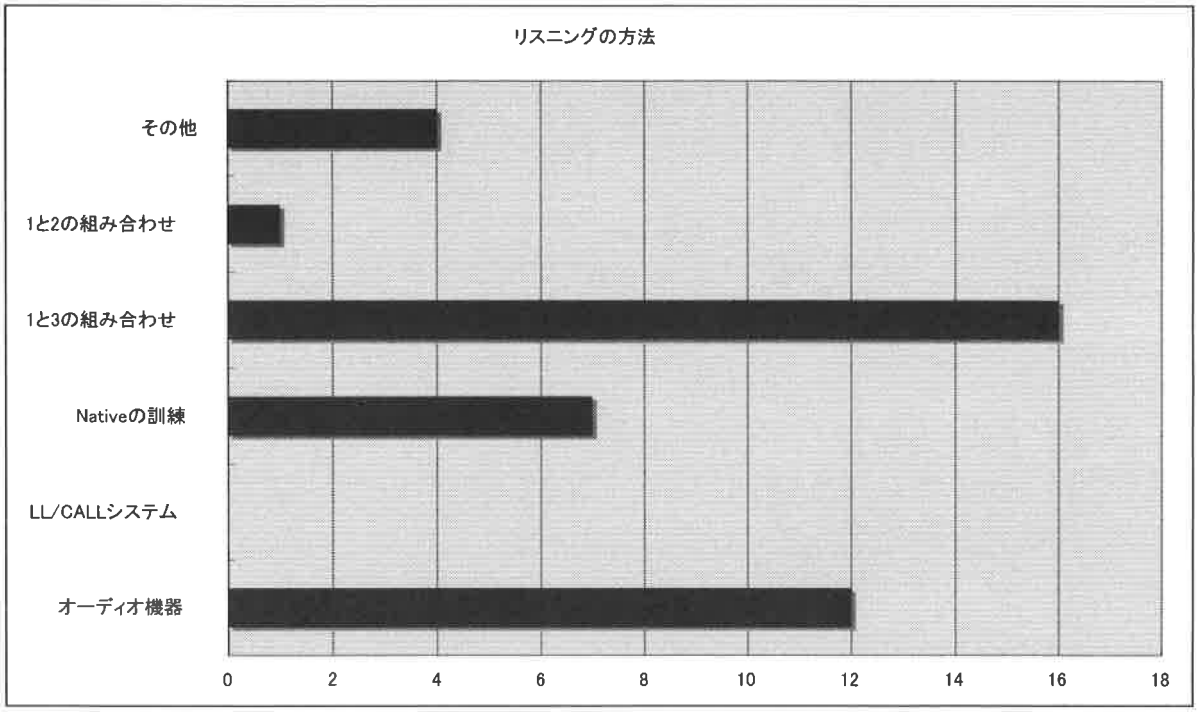
リスニング時間の割合[図 1]



2) リスニング教育実施の方法

リスニング教育の方法については、普通教室でオーディオ機器のスピーカーによる聞き取り方法と外国人教員による授業での訓練の組み合わせという回答が 16 校と最も多く、普通教室でオーディオ機器のスピーカーによる聞き取り方法が主体という回答が 12 校でそれに続き、LL 教室または CALL 教室での機器を用いた訓練はほとんど行われていないことがわかった。グループ別の結果も全体の結果と同様であった。結果は [図 2]の通りである。

[図 2]

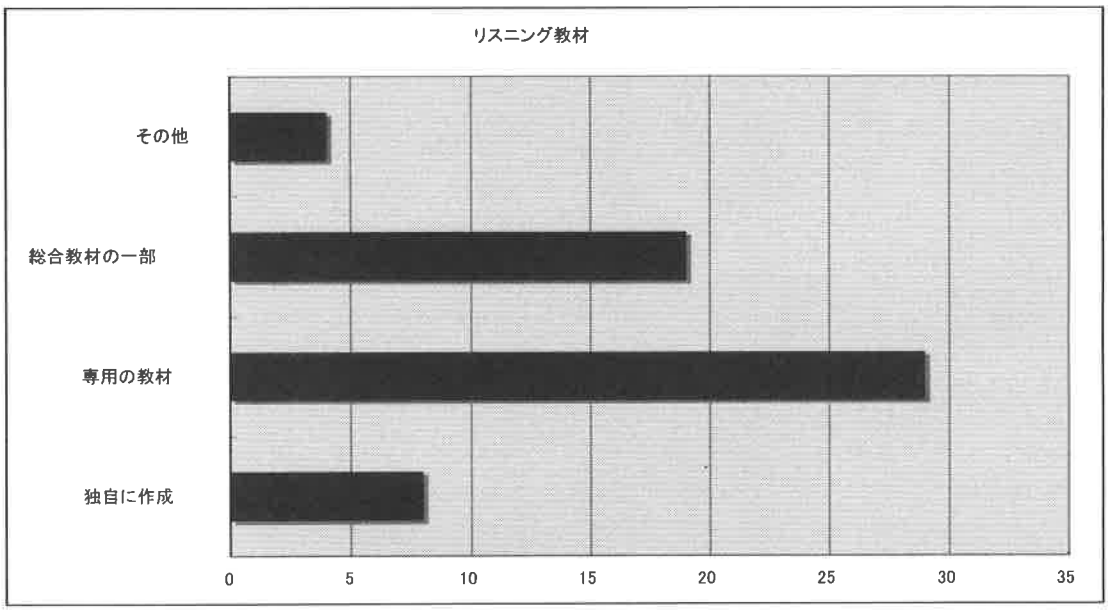


この結果は、リスニングの授業では高校生はヘッドフォンでの聞き取りにあまり慣れていないことが推測され、センター試験リスニングテストのイヤフォンを用いる方式そのものを経験しておくことも生徒にとっては準備につながるのではないかと考えられた。一般的には普通教室で聞き取る方法よりもヘッドフォンやイヤフォンを用いて聞き取る方がクリアな聞こえが得られるため、経験がなくても試験時に比較的良い結果が見込まれるので、必要不可欠というわけではないが、ヘッドフォンやイヤフォンでの英語音声の聞こえをどんなものか知っておけば、対策としては強化されるであろう。

3) リスニング教材の種類

リスニング教育の方法のうち教材については、リスニング専用の教材を用いている高校が 29 校で最多であり、総合英語などの総合的な教材のリスニング部分を利用している高校が 19 校で 2 位であった。他と比べると少ない件数ではあったが、独自に教材を作成している高校も 8 校あった。その他としてあげられていたのは、「TOEIC、英検等の教材」、「ビデオ・DVD 教材」、「教科書付属の物、AET が用意する。」であった。(複数回答) 結果を [図 3] に示す。

グループ別の結果については、第1群、第2群ともに、リスニング専用の教材を用いている高校が最も多く、僅差で総合的な教材のリスニング部分を利用しているという回答が続いていた。



[図3]

2. センター試験リスニングテスト得点の各大学入試算入の是非

1) 教員の意見

各大学入試にリスニングテスト得点の算入の希望、およびその理由について、教員と生徒の意見を尋ねた。

教員の意見では、「算入してほしい」と回答した高校が21校（52.5%）と最も多く、算入してほしい理由として寄せられた回答は次の通りである。

- リスニングを入れることにより、生徒の各領域の能力を総合的に伸ばそうとする動機づけになる。
- 高校生の努力の結果を評価するのは当然の事です。
- 現テストが読解(文法、語法等)重視していて、4技能を測定、考慮するべき。
- リスニングを重視するような入試にしないと中高の英語は変わっていかない。
- 高校教育内容がリスニング分野で今後更に充実、発展させるための原動力になると思われる。

- 4技能をバランス良く修得する事が英語教育の目的であるので、リスニングテストは聞く力を測る上で欠かせないものだと考えます。特に新課程の生徒にはリーディングやライティングで測る事の出来ない力を持っている生徒も多くいます。ただし、2006年度実施のリスニングテストについては、初年度であり実態が不明瞭であるため、テストそのものの有用性がどの程度のものかが問われると思います。
- 中高でのリスニング比重が高まるから。
- ①言語の運用能力を測定する重要な要素である。②実施するならば当然算入すべきである。
- 実用英語普及のためには入試で導入すれば、それだけ力が入れやすくなる。
- 試験として課す以上は、当然評価の対象にすべきだと思います。
- 言語として大切な要素なので。
- 実際にコミュニケーションがとれるためには、リスニングが必要なので。入試のための重箱の隅をつつくような英語には不満あり。
- 全国的にそのような動きなので。
- 本校は3年時の授業でリスニングに力を入れているため。
- 英語の総合的な力が見れるのではないか。
- 導入する以上は当然だと考えます。そうする事により、高校の授業も変化していくと思います。リスニングを入試から外すのは、外国語教育の基本をないがしろにするものです。長い議論を経て導入されるに至った経緯も十分考慮する必要があると思われます。
- 英語力総体の一部だから。
- 実践力として。

（自由記述回答を原文のまま記載。）

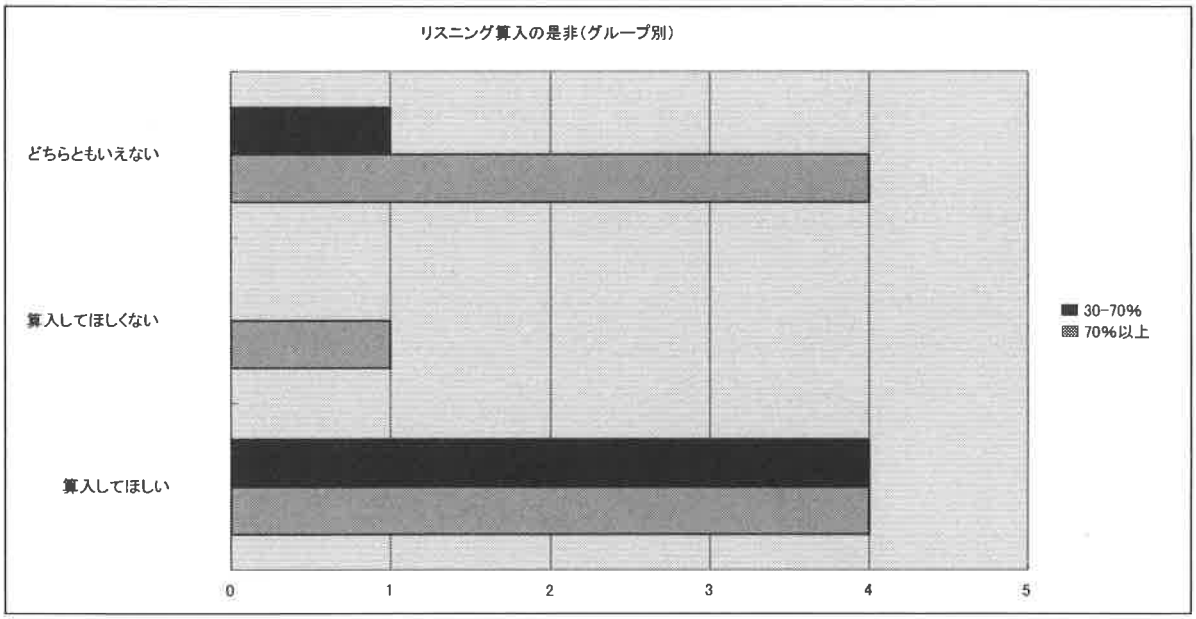
以上のように、「中高の英語教育が変わる」、「生徒の英語の総合力が伸ばせる」、「リスニング能力はコミュニケーションの要素である」、「導入する以上はリスニング能力も評価すべき」という内容に大別される意見が多かった。しかし一方で、「どちらとも言えない」とする回答も16校（40%）あり、リスニングテスト得点算入への賛否を決めかねている回答も多く見られた。「算入してほしくない」とする回答は3件であり、寄せられた理由は次のようなものである。

- リスニングテスト導入により、英語の他の分野(文法・長文等)の出題がなくなるわけではないので、受験生の負担が過大になる。
- リスニング学習は周囲の環境が大きく影響してくるものであると考えられるので、テストに不公平感が出てくるから。
- リスニングは現段階では授業のみで扱っているだけなので。

(自由記述回答を原文のまま記載。)

グループ別では、第1群は「算入してほしい」と「どちらともいえない」という回答が同数であった。第2群は「算入してほしい」が多数であった。この結果から、センター試験受験率の高いグループの方が慎重な姿勢であることがわかった。積極的に反対する意見は少なく、今後受験準備体制が整備されてくれば、算入に賛成する意見が増加することが予測されるが、テスト導入直後にあっては、大学側としても得点算入について慎重に検討することが必要である。グループ別の結果を[図4]に示す。

[図4]

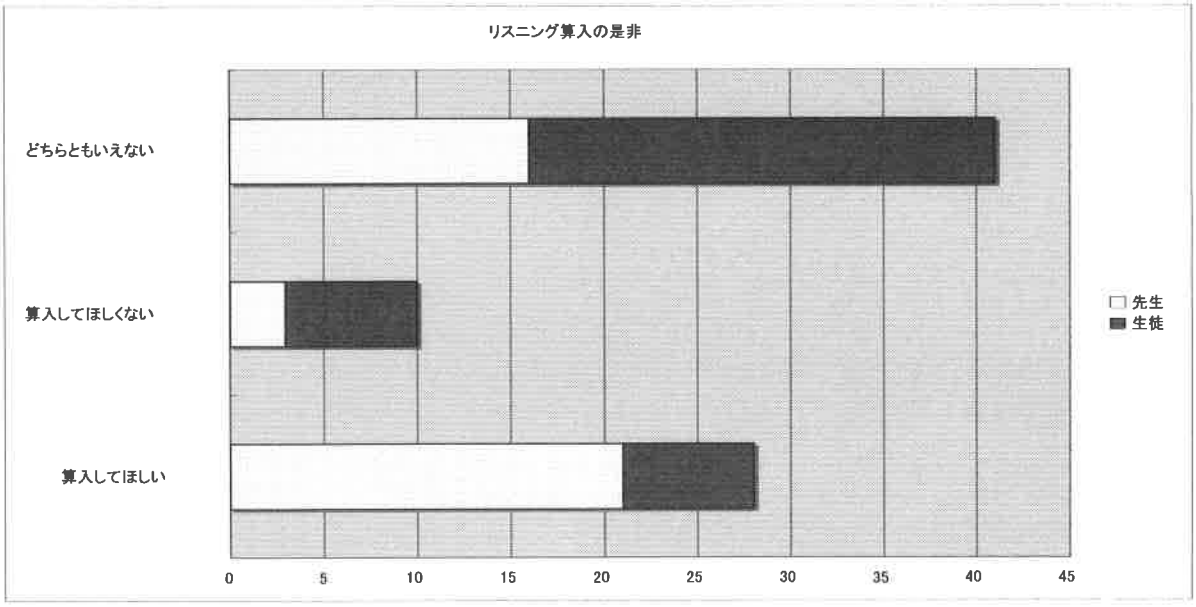


2) 生徒の意見

生徒の意見に関しては、今回は生徒を対象としたアンケートではなく、生徒自身からの回答を得ることが困難であったため、教員の受けている感触として生徒の意見がどのような状況かを尋ねるにとどまった。結果は、「算入してほしい」と「算入してほしくない」が

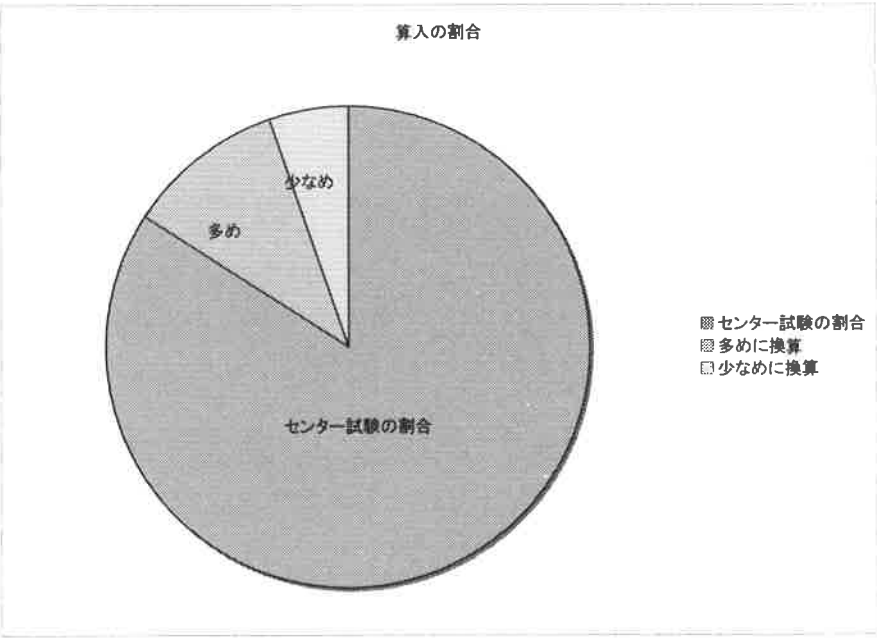
ともに7校で同数、「どちらともいえない」が25校で最多であった。1）および2）の全体の結果を[図5]に示す。

[図5]



3）算入の割合についての意見

「算入してほしい」と回答した高校に対して、算入はどのような割合がよいかについて回答を依頼した。結果は[図6]の通りである。「算入してほしい」と回答した高校のうち、「センター試験の割合（英語試験250点のうちリスニングテストの配点50点）」と回答した高校が16校と圧倒的に多く、「リスニングテストの得点を多めに換算する」、「少なめに換算する」がそれぞれ2校と1校であった。

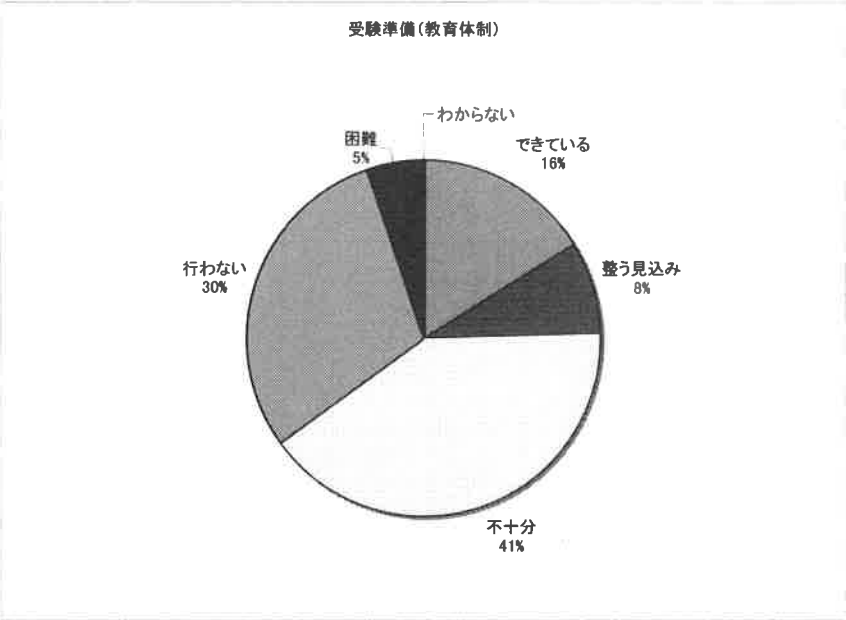


[図6]

3. リスニングテスト受験準備

1) 教育体制

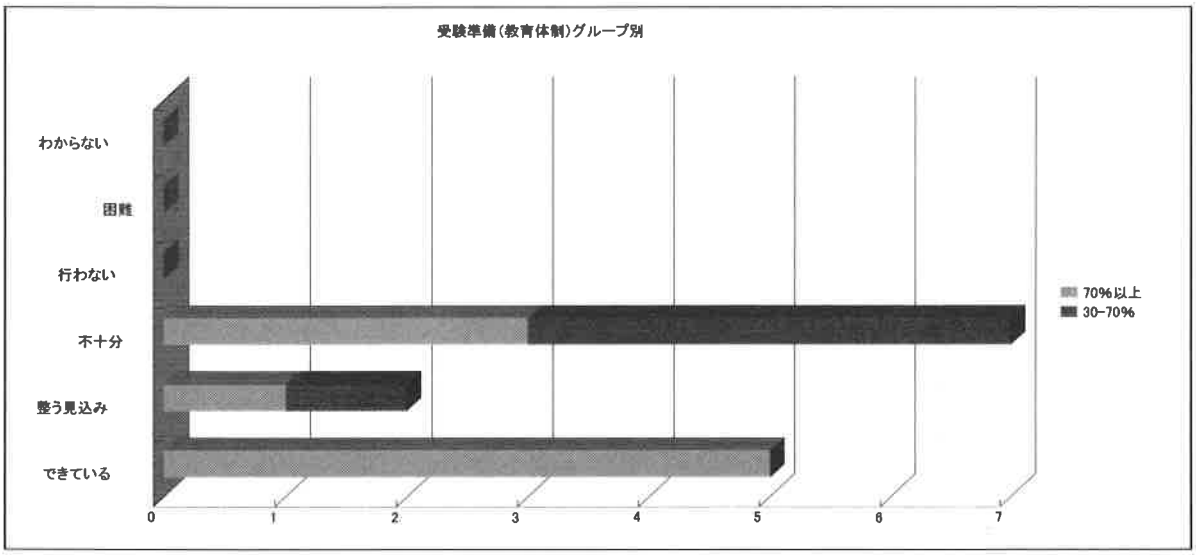
[図7]



リスニングテストの受験準備に関して、教育体制の点では、「準備しているが不十分である」との回答が15校で最も多く、「特に行わない」が11校でそれに続いた。「準備できている」が6校であり、「体制が整う見込み」と回答した3校と合わせても、全体の24%で、現時点では受験準備はまだ途上であることが推測された。結果を[図7]に示す。

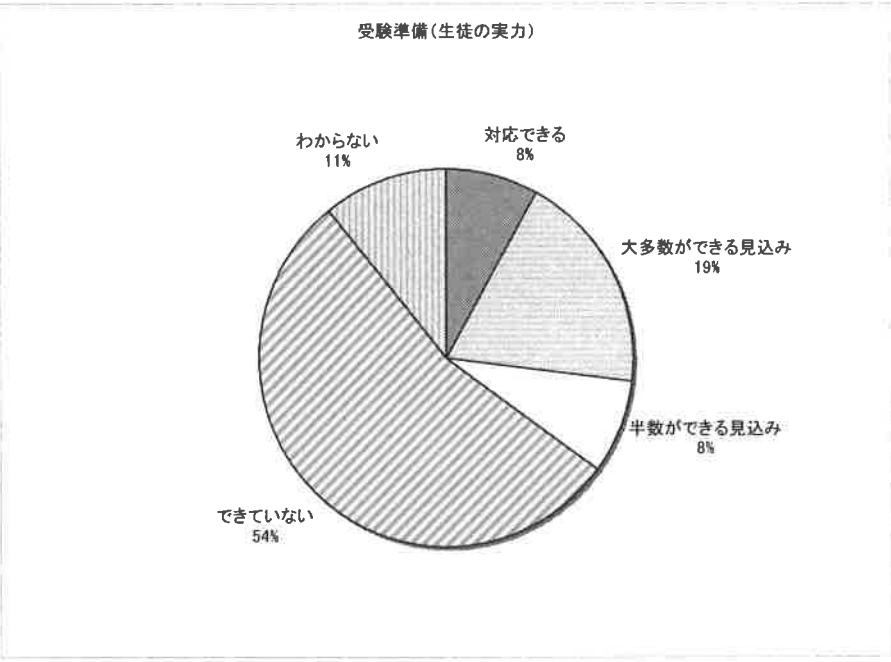
グループ別の結果は[図8]の通りである。第1群が「すでに受験準備ができている」、第2群が「準備しているが不十分である」との回答が多く、センター試験受験率によって高校間の格差が見られる結果であった。

[図8]



2) 生徒の実力

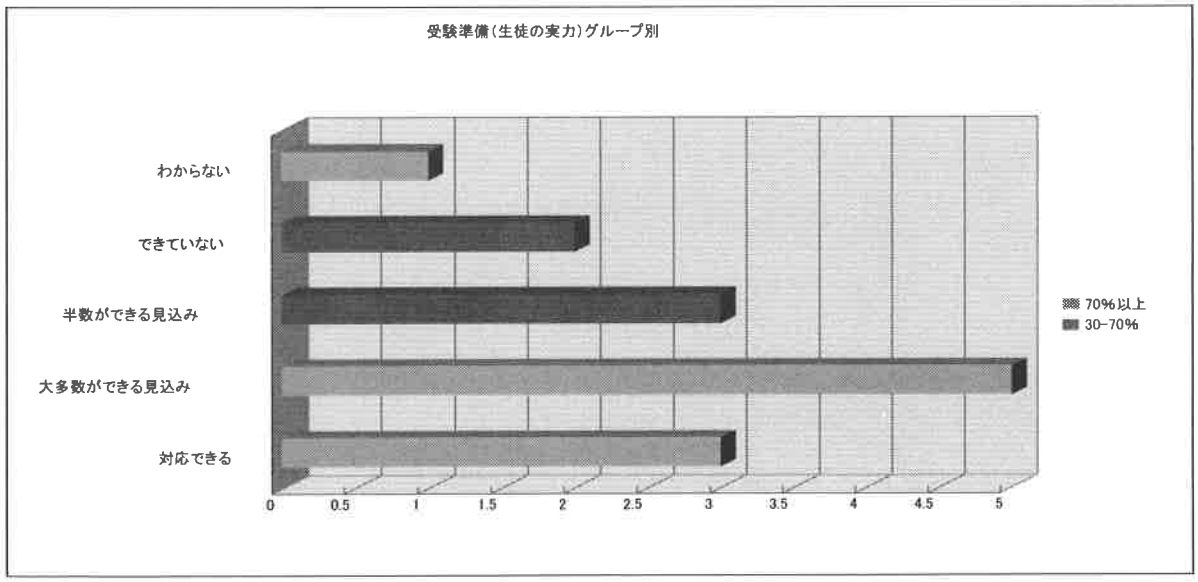
リスニング受験準備に関して、生徒の実力について50%以上得点できる実力を目安に回答を依頼した。「大多数が準備できていない」が半数以上を占める結果であった。結果を右の[図 9]に示す。



[図 9]

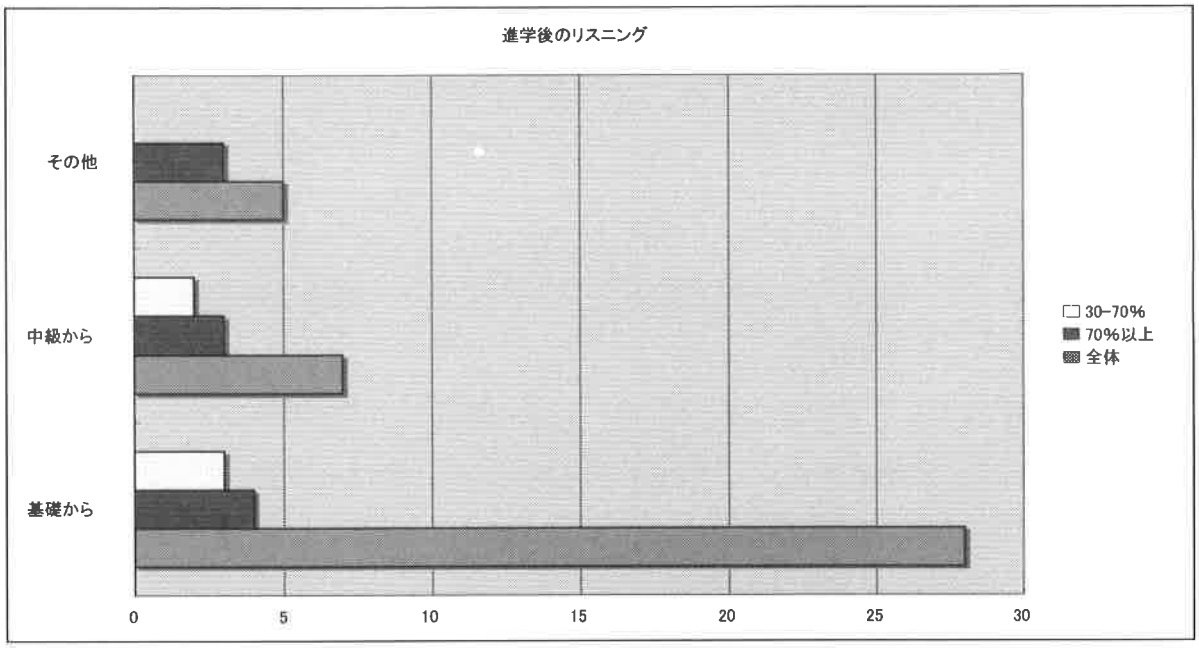
グループ別では、第1群については「現時点ではまだであるが、大多数の受験準備ができる見込みである」が1位、「大多数の生徒にすでに対応できる実力がある」が2位という結果であった。第2群については、「ほぼ半数は準備できている、またはその見込みである」が最多であり、僅差で「大多数が準備できていない」が続くという結果であった。結果は[図 10]の通りである。ここでもセンター試験受験率による高校間の格差が見られる結果となった。

[図 10]



4. 大学進学後の英語リスニングの教育内容

大学進学後の英語リスニングの教育内容について、結果を[図 11]に示す。センター試験受験率 30%以上の高校では「基礎から必要」、「中級レベルから」がほぼ同数であったが、全体では「基礎から必要」とする回答が圧倒的に多かった。高校時代で基礎を身につけることができる高校もあったが、本学のような英語専攻ではない学生を対象とする場合は、リスニング教育は基礎から必要という指針が得られた。今後の高校リスニング教育の動向を見定め、学生の側で十分な基礎固めを高校教育で実現できることが確認できる時期に方針の転換を再度検討することが実状に即した大学教育と言える。その他の意見としては、「学生の個人差に即してグレード別にする」、「大学のレベルによる」の 2 項目に分かれた。[図 11]



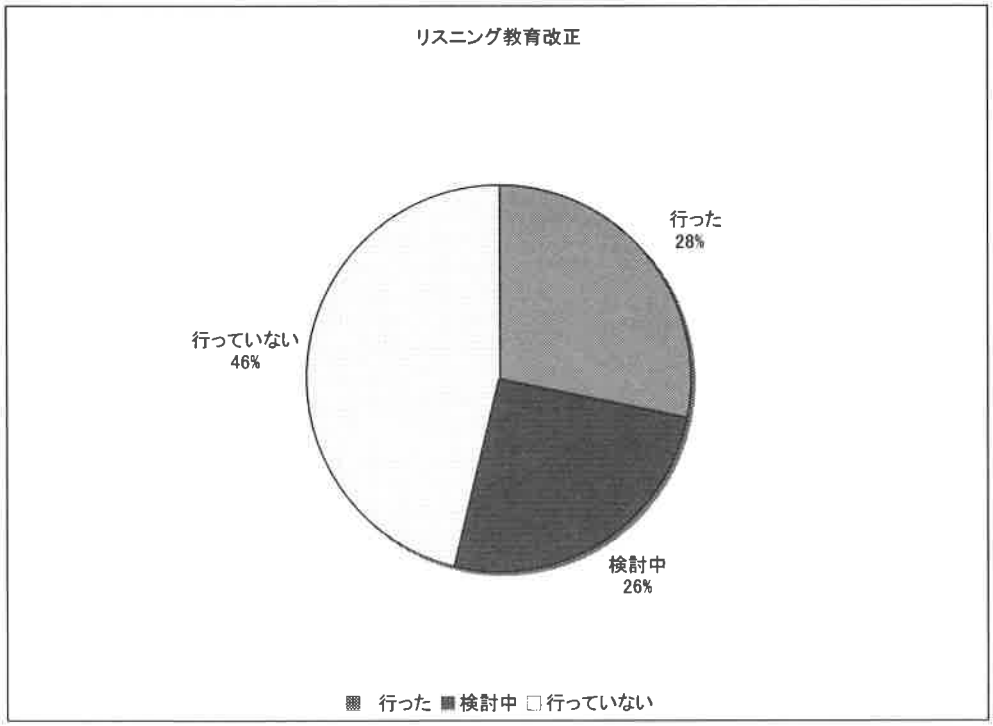
5. リスニング教育改正とその成果

1) リスニング教育改正の有無

リスニング教育内容の改正については、行っていない高校が 18 校と最多であったが、全体でも行った高校 11 校と検討中の高校 10 校を合わせると、行っていない数値を上回り、

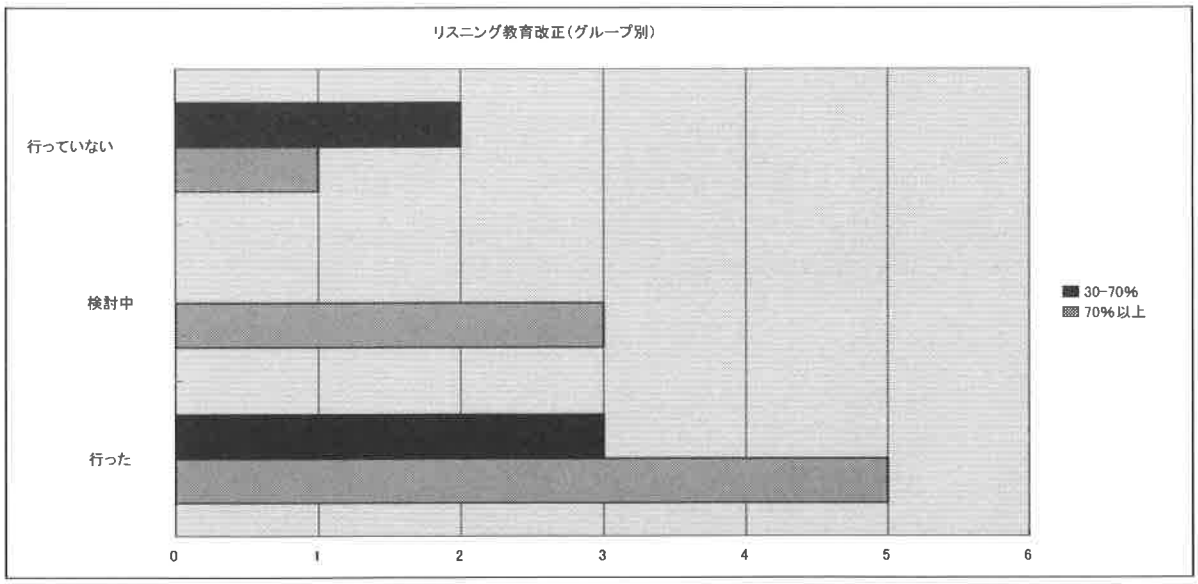
やはりリスニングテストを意識して教育改正の動きがあることが判明した。結果は、[図12]の通りである。

[図12]



グループ別に見ると、第1群は「行った」が最多で、「検討中」も多いという結果であった。第2群の高校では既に行った高校が多く、行っていなくても元々充実しているという回答もあった。グループ別の結果を[図13]に示す。

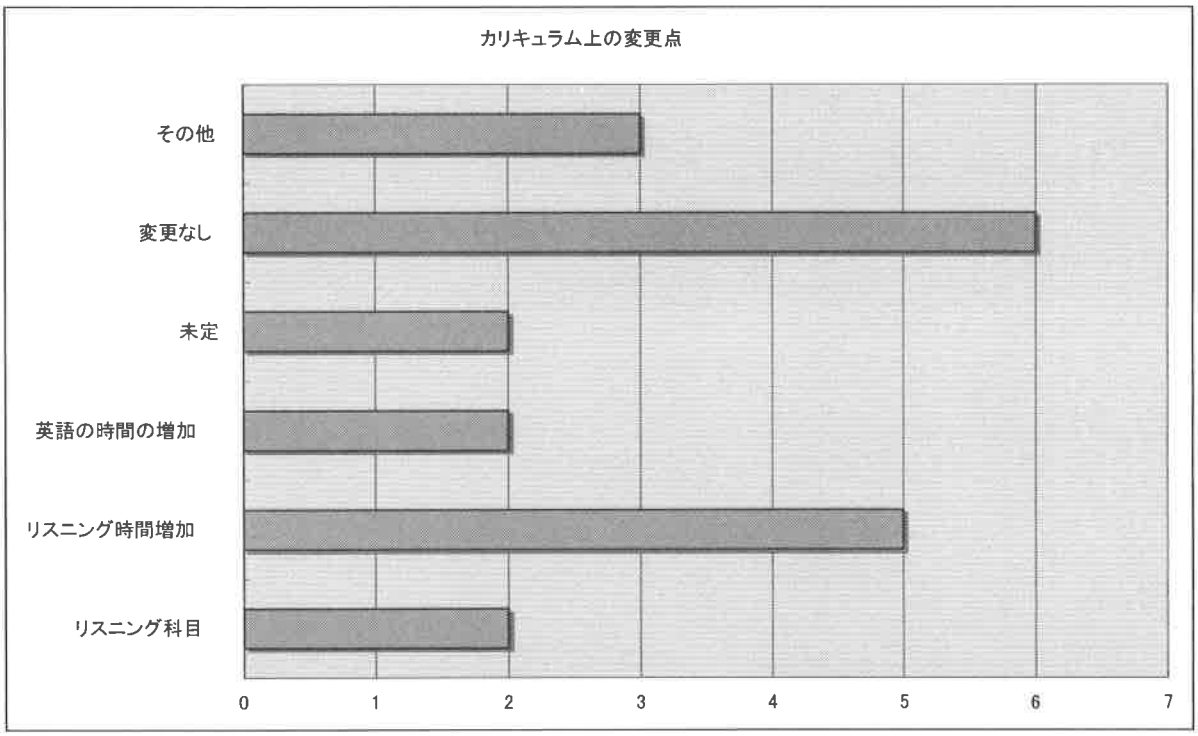
[図13]



2) カリキュラム上の変更点

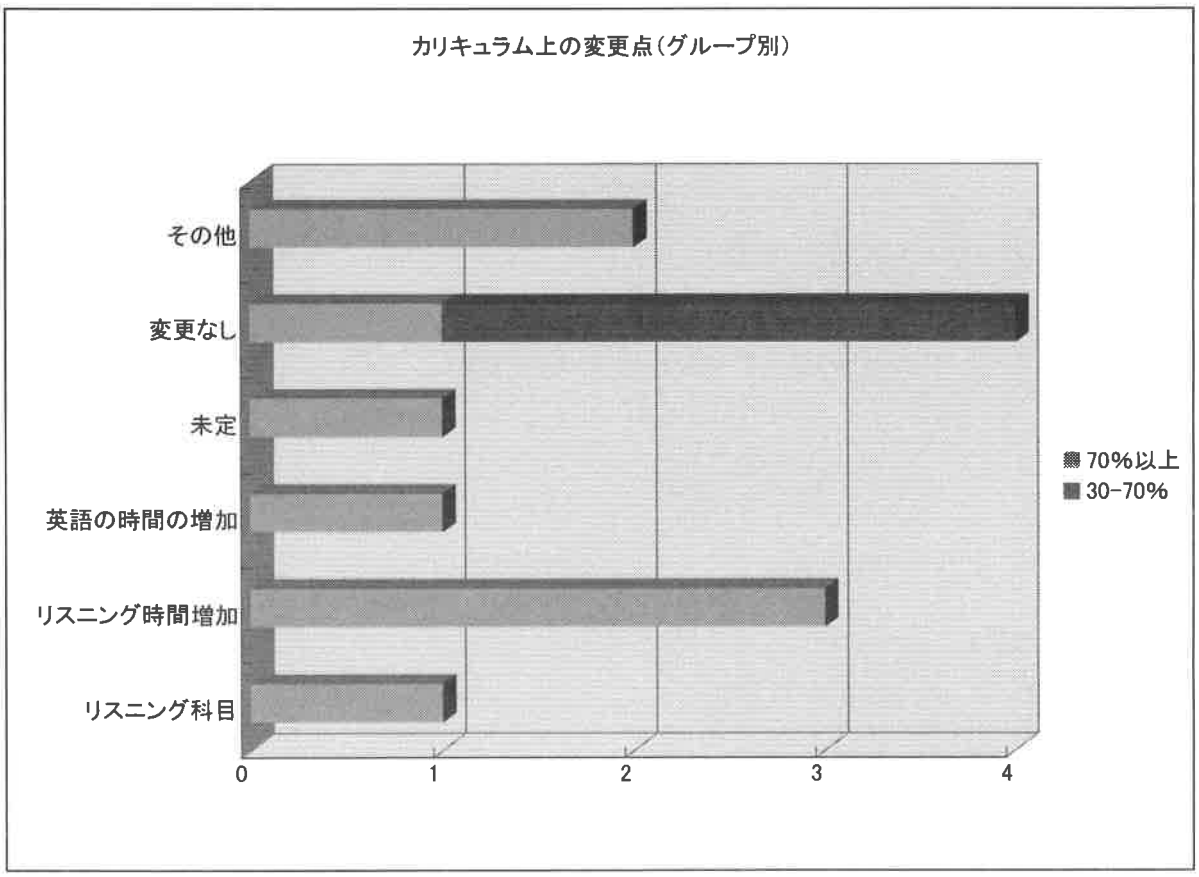
リスニング教育内容の改正を行った高校11校および検討中の高校10校について、変更点に関する回答を依頼した。カリキュラム上の変更はないとした高校が6校と最も多く、僅差（5校）で「リスニング科目の時間数の増加」が続く結果であった。「英語科目全体の時間の増加」、「リスニング強化のための科目新設」も、2校ずつあった。その他としては、定期リスニングテストの導入があげられていた。（複数回答）カリキュラム上の変更点の結果を、[図14]に示す。

[図14]



グループ別では、第1群に関してはリスニング科目の時間数の増加が最多であったがばらつきが見られた。第2群の高校は全校で変更なしという結果であった。結果は[図15]の通りである。

[図 15]

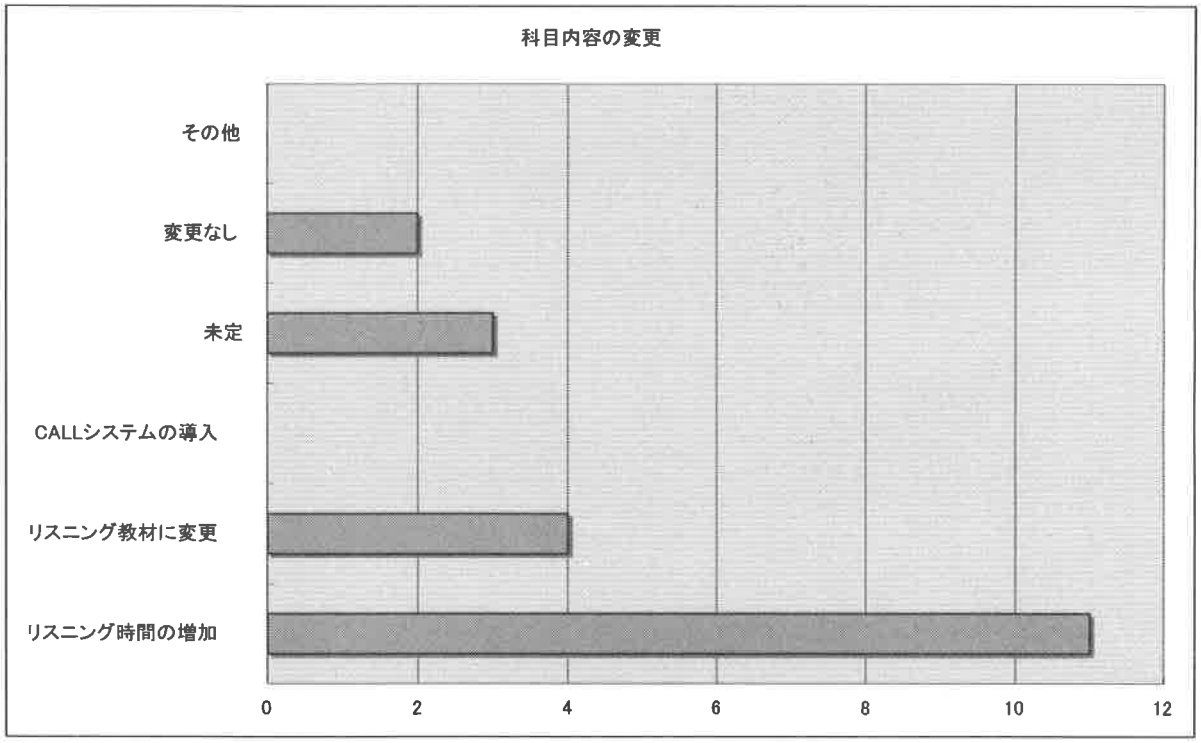


3）科目内容上の変更点

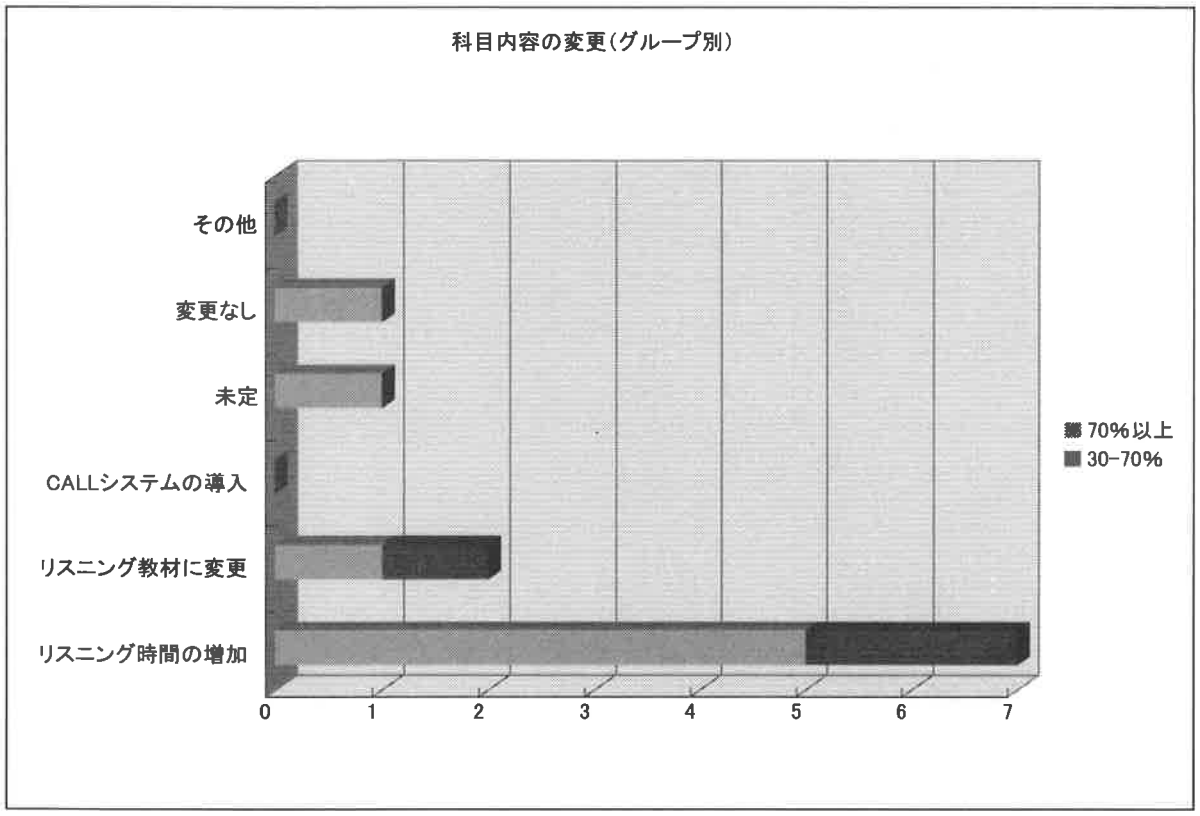
科目内容上の変更点については、「リスニング主体の教材に変更」が 4 校あったが、「リスニングに費やす時間の増加」が 11 校と圧倒的に多かった。（複数回答）グループ別でも同様の結果であった。全体、グループ別のそれぞれの結果を[図 16]、[図 17]に示す。

カリキュラム上、科目内容上、ともに、リスニング時間の増加という変更内容が最多であり、改正を行うにしてもリスニング教育に焦点を当てた大幅な教育改正ではないことが推測された。

[図 16]

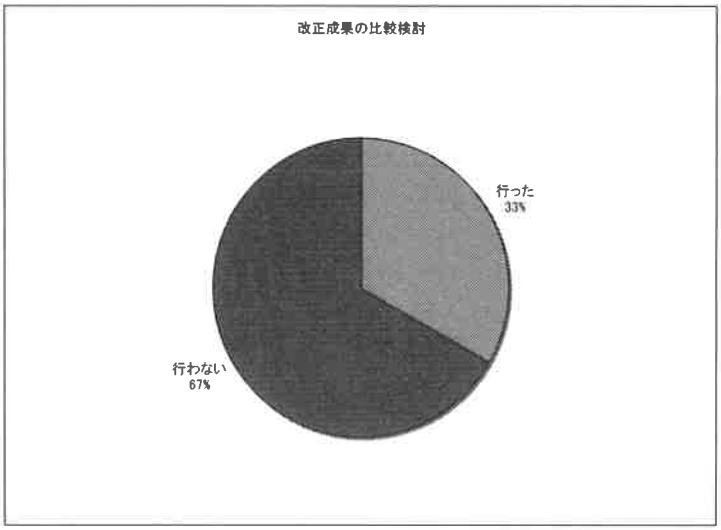

科目内容の変更
その他
変更なし
未定
CALLシステムの導入
リスニング教材に変更
リスニング時間の増加
0
2
4
6
8
10
12

[図 17]


科目内容の変更(グループ別)
その他
変更なし
未定
CALLシステムの導入
リスニング教材に変更
リスニング時間の増加
70%以上
30-70%
0
1
2
3
4
5
6
7

4) リスニング教育改正後の比較検討の有無

[図 18]

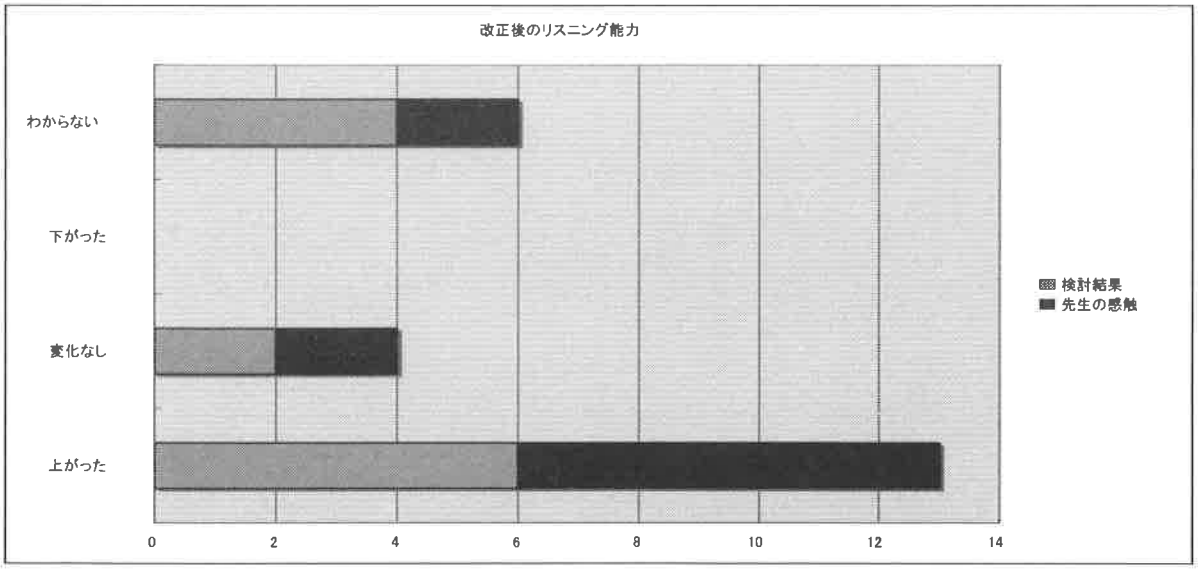


リスニング教育改正の成果の確認のため、比較検討を行ったかどうかについては、行った高校5校に対し、行っていない高校が 10 校と[図 18]のように3分の2を占める結果であった。現時点では改正からそれほど時間が経過しておらず、リスニング教育改正の検討を行う段階ではないことも推測された。

5) 教育改正後の生徒のリスニング能力

教育改正後、生徒のリスニング能力に向上が見られたかどうかについて回答を依頼した。改正後の比較検討を行っていない高校については、教員の感触を尋ねた。結果は，[図 19]の通りである。比較検討結果、教員の感触、ともに、生徒のリスニング能力に向上が見られたとする回答が多かった。グループ別についても同様の結果であった。

[図 19]



3. 自由記述による回答の結果と考察

1. センター試験英語リスニング導入の問題点

センター試験リスニングテスト導入について感じている問題は次のような項目であった。

- 設備の問題は大丈夫なのか？
- 成績の良い生徒はリスニングを筆記問題を解くのと同じ感覚で、聞きながら「英文解釈」して説いている。リスニングがコミュニケーション能力評価にはなっていない。TOEC のリスニングの方がまだ信頼性があるかもしれない。
- 現場は今のところ受験対策的に対応している。(授業の始めにリスニングテストを実施するなど) 本当は授業内容を変えていく必要があると思う。
- 理科３科目と合わせて、全国統一試験としてのセンター試験に限界が来ているように思います。(日程、受験生に求める量等)
- 受験準備の方法。
- 生徒は不安を感じるだろうが、入試が変わらなければ現在の聞く話すを苦手としている日本人の英語は変わっていかないと思う
- 英語を聴いて理解するという能力の評価が、機器を自分で操作してイアホンで聴くという作業形式で行われる事に対する若干の不安があります。
- リスニングテストの時間が 30 分間あり、また IC プレーヤー利用の操作も必要なので生徒の緊張感がピークに達するのではないかと思っています。30 分間いかに集中力を持続させるかが、難しい所だと思われます。現時点では問題レベルも不明であるので易しい会話分がありながら生徒のレベルからいくと難解すぎる論説文等が出題されるとすると目標設定が困難だと思われます。
- 配点は各大学で柔軟に対応して良いと思う。
- リスニング対策において、センター試験と全く同じ方式(一人一人にヘッドホン付きミニカセットを配布する)で行う事が出来るところと出来ないところがあり、不公平にならないか。
- 新課程のコミュニケーション能力の育成というものが、このリスニングテスト導入と、どう関連づけられるのでしょうか。
- 現状では受験者がほとんどいないので、個別対応だけで全体としての取り組み

になっていない

- 質問の意向とは異なりますが、本校はセンター試験を受ける生徒がほとんどいないので。
- 外国語教育は中学・高校・大学の一連の段階的な流れの中で系統的になされるものだと思っています。相互に橋渡しが上手くいくためにテストの工夫や作成がなされるべきだと考えております。
- 大学ごとに、どの程度の割合にしていくのか。（リスニングの点数割合）試験内容とレベルはどうなるのか？
- あまりに一度に聞き取る量が多い問題は、生徒に負担をかけ、学校外(塾等)での教育に走ろうとする傾向を生むのではないだろうか。機器の操作に日常的に慣れる必要があると思われる。

（自由記述回答を原文のまま記載。）

リスニング教育重視には賛同する意見が多い一方で、センター試験リスニングテストの機器操作など解答方法に対する不安、高校による受験対策の格差などに関する問題点が多く指摘された。本調査の時期がリスニングテスト導入前であったため、特に機器操作に対する不安が多かったことも考えられる。前回のテストではICプレーヤーの持ち帰りが可能であったので、次回の受験者のためにストックして現在は訓練に利用している高校もあるのではないかと思われる。受験対策については、それぞれの高校の特徴もあり、受験者を抱えるすべての高校で同レベルの受験対策が可能であるとは限らず、回答者の指摘するように、受験者の条件に高校間で格差が生じる問題は避けられない。特にリスニングテスト導入時期にあっては、迅速に対応できる高校と困難な高校に在籍する生徒の格差がより大きなものになることが考えられる。センター試験自体の限界を指摘する声もあった。2日間で全科目を消化する現在の日程では、勤務先がセンター試験会場であり、試験監督等として試験に関わっている著者の目から見ても、試験科目のほとんどを受験する生徒の負担は相当なものである。今回、リスニングテストが追加され、さらにその負担は大きくなったものと思われる。受験のための学習は生徒の総体的な能力向上につながり、重要なものであるが、教育の受益者であるべき生徒の負担を増し、全国統一試験といいながら、受験準備の条件には格差が生じる現状は問題である。各高校独自の試みだけでは対策のレベルを同様に上げていくことは難しいであろう。高校教育を包括的にとらえ、受験条件のできる限りの統一を図るべく、大学入試センターの側からも受験対策に関する高校への支援や

助言を行うことが検討されてもよいのではないだろうか。大学入試といえども、生徒のための教育の一環である。教育のためという大前提がなおざりにされることなく、現在の受験システムが構築され試験が実施されているのか、問い直す時期に来ているのかもしれない。

2.既出質問項目以外の高校としての取り組み、対策

上記で取り上げた項目以外で、学校、あるいは英語科として取り組んでいるリスニング教育やセンター試験リスニングテスト導入対策として回答されたのは以下の項目であった。

- リスニング教材(問題集を含む)を集めて集中的に指導を考えている。英検を重視し、リスニングの練習を加えている。
- 土曜補習等でリスニング講座を設けている。
- 授業ではなく、家庭学習(宿題)としてリスニング教材を使っています。
- リスニングテスト形式に慣れるように、時間数を増やしているが、一回やってみないとわからないし、対策もたてられない。検討を要すると思われる。
- 国際教養科、時事、洋画等(必ずしもリスニング対策というわけではないが)
- 受験生でリスニングが必要な者には、各大学の過去問のCD等を貸し出している。
- 3年は選択の英語しかありませんが、なるべくAETの時間を多くしたり、専用教材で小テストを毎回やっている。
- 予備校のサテライト講座を導入。
- 専門科の英語科として日頃AETとのTT、コンピューター、LL演習の授業、英語キャンプ等の行事を行っており他校よりリスニング教育にかける時間数が多いので特別にセンター試験対策としてリスニング教育の改正は実施しませんでした。外国出版社の教材「リスニングビデオ教材」を取り入れてできる限り、自然な英語に親しませたり、実用英語技能検定春秋全員受検等、日頃から取り組んでいる事が結果として生徒のリスニングテスト受験対策につながっていくと考えています。そのような力を身につけた生徒が貴校を受験していくこともありますが、今後とも宜しくお願いします。
- ALTの活用やリスニングの時間、そして英語による授業を導入することで、英

語が好きになってくれる生徒を少しでも増やせればと考えています。

- 音読を中心にしたリスニングを取り入れている。(CD等を聞いた後に音読暗唱等を行う)
- 本校の場合、リスニングは3年次に特に力を入れてやっていますが、「大学入試のため」よりは「社会人になっても使える英語」という目的が大きいと思われます。(もちろん大学入試を目標にしている生徒もいますが。)オーラルコミュニケーションの教科書とCD教材を主に利用しています。
- これから具体的な検討に入る段階です。
- 英語検定の準2、2級合格を達成目標として奨励している。

(自由記述回答を原文のまま記載。)

以上の回答でわかったことは、各校とも工夫し対策に努めているということである。英語検定受験の奨励という回答が複数の高校からあったが、他の方法としては多種多様であった。早期の評価は難しいと思われるが、学校間、あるいは教員間で、どの方法が効果的であったかなどの評価について情報交換できれば、それぞれの高校での取り組みもしやすくなり、対策も充実するのではないかと考えられた。各高校の状況もあるので一概にはいえないが、各校の特色を出しつつも、生徒の平等を期すために、ある一定のレベルまでは生徒の学習機会、学習条件が同等あるいは同質になることが望ましい。本学でも県内の英語教員の研修が行われているが、そのような場を情報交換に活用することが対策の向上につながるであろう。各自治体や全国といったさらに大きな枠組みでの情報交換も活発になることが望まれる。

結語

リスニング能力強化のための教育改正については、行っていない高校が多かったが、行った高校と検討中の高校を合わせると、その数値を上回った。各高校でセンター試験リスニングテスト導入は十分意識され、全体として受験対策は改善に向かう傾向があると考えられた。

しかし、その充実度に関していえば、いまだ途上で不十分という高校が多いという結果であった。次段階の英語教育を担う大学では、リスニング教育のレベルを基礎から中級へ上げるなどの急激な変更は時期尚早であると考えられた。センター試験リスニングテスト得点の算入に関しても、即座に決定せず、進学後の学生の能力も確認しつつ、検討していかなければならない。

各高校のリスニング教育に関する改正の内容としては、リスニングの時間数の変更が多数であった。時間数だけの問題ではないが、英語技能の場合、訓練が重要であり、時間数を多く取る効果は他の科目より顕著に現れることが考えられる。リスニング教育に割く時間が予想よりは多いと考えられ、リスニング教育の充実を図る姿勢が感じられる結果であった。

リスニングの基礎を身につけ、能力の向上を図る方法としては、現状で多数を占めた普通教室でのオーディオ機器のスピーカーによる聞き取りよりは、LL教室、CALL教室での学習のほうがはるかに効果があるが、設置予算の問題、教員の技術研修の問題等、まず解決すべきことがあるのが実状であろう。

教育改正を行っていても、改正後の比較検討を行っている高校は少なかった。今後、改革が進むに連れ、検討が行われ、改正の成果が具体的に把握され、生徒のリスニング能力向上の実像が見えてくるようになることが期待される。

本調査によって、各高校ともリスニングテスト受験対策に努め、工夫されていることがわかった。その中で、念頭に置いているのは受験だけではなく、生徒の総合力の向上、英語の能力の習得が大切であるという意識をきちんと持っている教員の姿勢に敬意を表したい。本調査はセンター試験リスニングテスト導入への対策の調査を中心とするものであったが、受験対策に追われながらも教育の本質を見失わない教員の姿も知り得る結果となった。

本調査の実施時期がセンター試験リスニングテスト導入前であり、まだ、検討中の部分や回答者の側で回答しにくい内容もあったのではないかと考えられる。実際にセンター試験でリスニングテストを経験し、教育改正の方向転換を考慮する高校も出てくることも予測される。また、今回は長野県内の高校を対象とする調査であったため、他県の高校との比較検討は行っていない。視野を広げつつ、今後も各高校の対策や進学後の学生の能力の動向を追っていくことを検討する必要がある。

資　　料

長野県内高等学校の英語リスニング教育実態調査ご協力のお願い

時下、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

さて、平成 18 年度大学入試センター試験より英語リスニングテストが導入されます。貴校でも対策に努めておられることと存じますが、大学教育に携わる者として、高等学校の教育の変化に伴い、大学教育にも改革の必要性があることを感じているところです。また、センター試験の英語科目を大学入学試験に算入する場合、リスニングテストの得点をどう処理するかなども、大学として検討しなければならない課題です。そこで、このたび、長野県看護大学特別研究費の助成を得て、長野県内高等学校の英語リスニング教育の実態を調査し、今後の大学入学試験、及び大学教育の指針を探ることといたしました。ご希望により調査結果報告書を送付させていただきますので、他校の教育との比較検討などにも活用していただけるかと存じます。つきましては、高等学校英語リスニング教育実態調査にご協力を賜りますよう、伏してお願い申し上げます。

調査は質問紙形式をとり、内容は選択肢に○をつける質問がほとんどです。調査結果は匿名性を守ってデータ処理し、本調査以外の目的には使用しません。なお、宛先は英語科主任とさせていただきましたが、ご回答は英語教員であればどなたが担当されても結構です。9 月 20 日までに同封の封筒にご回答を入れ、ご返送いただけますと幸甚です。

2 学期に入り、大変お忙しい折とは存じますが、高等教育向上のために、調査のご協力をどうぞ宜しくお願い申し上げます。

長野県看護大学

外国語　教授　　西垣内磨留美

電話／ファクス：0265-81-5141

e-mail: mnishiga@nagano-nurs.ac.jp

質問票

高校名	
（　　）報告書送付希望	

差し支えなければ、ご記入ください。

調査結果報告書送付をご希望の場合は、希望欄（　）にチェックのうえ、必ずご校名をご記入ください。

＊選択肢がある質問については、番号に○をおつけください。

＊複数科ある高校の場合は、全日制で最も大学進学率の高い科のデータでご回答ください。

1.昨年度の卒業生の大学進学率は何パーセントでしたか。

4年制国公立大学*	4年制私立大学	短期大学	浪人

＊国立大学法人を含む。

2.昨年度の卒業生の大学入試センター試験の受験率は何パーセントでしたか。(科目数を問いません。)

%

3.現在の英語科目全体の年間総授業時間数（補講を含む）をお知らせください。

1年生	2年生	3年生

補足説明がある場合は、下に記述してください。

4.設問3のうち、リスニング教育に費やしている時間（English Nativeによる授業を含む）はおおよそ何パーセントですか。○をおつけください。

1年生	5%未満	5〜10%	15〜20%	25〜30%	35%以上
2年生	5%未満	5〜10%	15〜20%	25〜30%	35%以上
3年生	5%未満	5〜10%	15〜20%	25〜30%	35%以上

5.リスニングの方法はどのようなものですか。

1.普通教室でオーディオ機器のスピーカーによる聞き取りが主体

2.LLまたはCALL教室でヘッドフォンを用いた聞き取りが主体

3.English Nativeによる授業での訓練が主体

4.上記のうち（　　）と（　　）のほぼ均等の組み合わせ

5.その他　（　　）

6.リスニング教材はどのようなものですか。（複数回答可）

1.独自に作成している。

2.リスニング専用の教材を用いている。

3.総合英語などの総合的な教材のリスニング部分を利用している。

4.その他　（　　）

7.2006年度センター試験よりリスニングテストが導入されますが、その得点を大学の入学試験の得点として算入するか否かは各大学の判断に任されています。先生（方）は算入についてどのようにお考えですか。

1.算入してほしい

理由：

2.算入してほしくない

理由：

3.どちらともいえない

8.生徒は算入についてどのように考えているでしょうか。(先生（方）が日頃お持ちになっている感触で結構です。)

1.算入してほしい

2.算入してほしくない

3.どちらともいえない

設問7で1に○をつけた方は設問9に、それ以外の方は設問10にお進みください。

9.算入する場合は、どのような割合がよいとお考えですか。

1.センター試験の割合のまま（英語試験250点のうちリスニングテストの配点50点）

2.リスニングテストの得点を多めに換算するのがよい

3. リスニングテストの得点を少なめに換算するのがよい

10.貴校では教育体制の点で、センター試験リスニングテストの受験準備ができていますか。

1.すでに受験準備ができている

2.現時点ではまだであるが、体制が整う見込みである

3.準備しているが不十分である

4.特に受験準備は行わない

5.体制を整えるのが困難である

6.わからない

11.生徒（センター試験受験者）の実力の点で、リスニングテストの受験準備ができていますか。(50%以上得点できる実力を目安にお答えください。)

1.大多数の生徒にすでに対応できる実力がある

2.現時点ではまだであるが、大多数の受験準備ができる見込みである

3.ほぼ半数は準備できている、またはその見込みである

4.大多数ができていない

5.わからない

12. 大学進学後の英語リスニングの教育内容についてお聞きします。

1. やはり基礎から必要である

2. 高校で基礎は習得するので、中級レベルからでよい

3. その他（　　）

13. センター試験リスニングテスト導入に備え、貴校では英語リスニング教育について何らかの改正を行いましたか。(○をおつけください。)

はい　　検討中　　いいえ

改正を行った高校、あるいは検討中の高校は次の設問に、行っていない高校は設問 18 にお進みください。

14. カリキュラム上の変更内容についてお聞かせください。(複数回答可)

1. リスニング強化のための科目を新設

2. 既存のリスニング科目の時間数の増加

3. 英語科目全体の時間数の増加

4. 具体的内容は未定

5. 変更なし

6. その他（　　）

15. 科目内容の変更についてお聞かせください。(複数回答可)

1. リスニングに費やす時間の増加 (native 担当を含む)

2. リスニング主体の教材に変更

3. CALL システムの導入

4. 具体的内容は未定

5. 変更なし

6. その他（　　）

大学入試センター試験英語リスニング導入に伴う
長野県内高校の英語科目内容、授業実施形態の変化に関する研究

研究代表者　西垣内磨留美

本研究は、1)大学入試センター試験英語リスニング導入に伴う長野県内高校の英語科目内容、授業実施形態の変化の実態調査、2)長野県看護大学入学者選抜試験へのセンター試験英語リスニング採用に関する提言、3)長野県看護大学カリキュラム改革における英語科目内容、及び授業実施形態の改革に関する指針の探査、4)調査報告書送付による調査対象校における他校とのリスニング教育内容に関する比較検討への活用を目的とし、長野県内全日制高等学校 106 校を調査対象として実施された。調査方法は、自記式質問紙調査とし、平成 17 年 9 月に各高校英語科主任宛質問票の郵送及び回収という形で行われた。40 校からの回答を得、回収率は37.7%であった。主な質問項目としては、センター試験受験率、英語科目総時間数中のリスニング教育の割合、リスニング教育の方法、センター試験リスニングテスト得点の各大学入試算入の是非、リスニングテスト受験準備、カリキュラムまたは科目内容上のリスニング教育改正、また、自由記述形式で、センター試験英語リスニング導入の問題点、既出質問項目以外の高校としての取り組み、対策に関して回答を依頼した。データは、全体の統計に加え、センター試験受験率 70%以上および 30ー70%の高校を抽出して処理された。

リスニングテスト受験準備に関しては、教育体制、生徒の実力ともに、やはり進学校では準備が整っている傾向にあり、全体としては準備が不十分という回答が多かった。教育内容の改正については、行っていない高校が最多であったが、センター試験受験率 30%以上の高校では既に行った高校が多く、全体でも行った高校と検討中の高校を合わせると、行っていない数値を上回り、リスニングテストを意識して教育改正の動きがあることが判明した。しかし、リスニングに費やす時間の増加という変更内容が最も多く、リスニング教育に焦点を当てた大幅な教育改正ではないことが推測された。リスニング教育の方法については、普通教室でオーディオ機器のスピーカーによる聞き取り方法と外国人教員による授業での訓練の組み合わせという回答が最も多く、LL 教室または CALL 教室での機器を用いた訓練はほとんど行われていないことがわかった。リスニングの授業では高校生は自分で操作する機器を用いた聞き取りにあまり慣れていないことが推測され、センター試験リスニングテストの IC プレーヤーを用いる方式への不安の声が上がるのも首肯できる。リスニングテスト得点の各大学入試算入の是非に関しては、算入してほしいと回答した高校が最も多かったが、「どちらとも言えない」とする回答も 40%あり、リスニングテスト得点算入への賛否を決めかねている回答も多く見られた。積極的に反対する意見は少なく、今後受験準備体制が整備されてくれば、算入に賛成する意見が増加することが予測されるが、テスト導入直後にあっては、大学側としても得点算入について慎重に検討することが必要である。大学進学後のリスニング教育については、センター試験受験率 30%以上の高校では「基礎から必要」、「中級レベルから」がほぼ同数であったが、全体では「基礎から必要」とする回答が最も多く、本学のように英語専攻ではない学生を対象とする場合は、リスニング教育は基礎から行う方が学生のニーズに合っているという指針が得られた。今後の高校リスニング教育の動向を見定め、学生の側で十分な基礎固めを高校教育の段階で実現できることが確認できる時期に方針の転換を再度検討することが実状に即した大学リスニング教育のありかたではないかと考えられた。

大学入試センター試験英語リスニング導入に伴う

長野県内高校の英語科目内容、授業実施形態の変化に関する研究

長野県看護大学
外国語
西垣内磨留美

研究の目的

- ■センター試験英語リスニングテスト導入に伴う県内高校の英語科目内容、授業実施形態の変化の実態調査
- ■看護大入学試験へのセンター試験英語リスニング得点算入に関する提言
- ■看護大カリキュラム改革における英語科目内容、及び授業実施形態の改革に関する指針の探査
- ■報告書送付による対象校における他校とのリスニング教育内容に関する比較検討への活用

方法

- ■実施時期：平成17年9月
- ■調査対象：
  長野県内全日制高等学校106校
- ■調査方法：
  自記式質問紙を各高校英語科主任宛郵送
- ■回収：40校（37.7%）

調査項目

- ■センター試験受験率
- ■リスニング教育の方法
- ■センター試験リスニングテスト得点の各大学入試算入の是非
- ■リスニングテスト受験準備
- ■カリキュラムまたは科目内容上のリスニング教育改正
- ■センター試験リスニング導入の問題点
- ■高校としての取り組み、対策

まとめ1　実態

- 受験準備（教育体制、生徒の実力）
  - 進学校では整う。全体としては不十分。
- 教育内容の改正
  - リスニングテストを意識して教育改正の動き
- 変更内容：リスニングに費やす時間の増加
  - 大幅な教育改正ではない
- リスニング教育の方法
  - 普通教室でオーディオ機器のスピーカーによる聞き取り+外国人教員による授業での訓練

↓

ICプレーヤーを用いる方式への不安

まとめ2　問題点と取り組み

- リスニング重視には賛同
- 機器操作など解答方法に対する不安
- 高校による受験対策の格差

- 各校とも工夫し努力
- 方法的にはばらつき

まとめ3　リスニング得点の大学入試算入

- 「算入してほしい」が最多
- 賛否を決めかねている回答も多い

↓

- 大学側は慎重な検討が必要

まとめ4　大学のリスニング教育

- 「基礎から必要」という意見
- 調査結果：高校でのリスニング対策不十分

↓ ← 本学学生：英語専攻ではない

- 指針：
  当面、リスニング教育は基礎から

協力高等学校

明科高等学校
赤穂高等学校
伊那北高等学校
上田高等学校
臼田高等学校
大町高等学校
大町北高等学校
岡谷工業高等学校
上伊那農業高等学校
軽井沢高等学校
小海高等学校
更級農業高等学校
篠ノ井高等学校
下高井農林高等学校
須坂園芸高等学校
須坂商業高等学校
諏訪実業高等学校
諏訪清陵高等学校
諏訪二葉高等学校
創造学園大学付属高等学校
田川高等学校
蓼科高等学校
茅野高等学校
豊科高等学校
中条高等学校
中野実業高等学校
長野商業高等学校
長野西高等学校
長野日本大学高等学校
長野東高等学校
長野吉田高等学校
野沢南高等学校
文化女子大学付属長野高等学校
穂高商業高等学校
松商学園高等学校
松代高等学校
松本県ヶ丘高等学校
松本蟻ヶ崎高等学校
屋代南高等学校

謝　辞

ご多忙の折に多大なご協力を賜り、丁寧にご回答頂きました各高等学校英語科教員の皆様に心よりお礼申し上げます。